

より萼の表皮には風船状の单細胞が突出する。萼片は基部で融合。萼片に関しては、下部で5葉跡が主脈跡となり、次にこれと交互する5個の側脈跡を発出する。花弁は1葉跡。雄ずいは20個、単体をなし、長さの異なる3種がある。対花弁位置の葉跡5個が下方で現われて5個の雄ずいに到り、次に対萼位置の葉跡5個が現われる。後者は3個に分裂して15個の雄ずいに至る。3個の中、中央のものに関する雄ずいが最も長く、他は最も短かい。対花弁位置の雄ずいは中間。雄ずい筒内部の花盤には20個の裂片がある。花盤には雄ずいの葉跡の分枝による管束がある。心皮は3葉跡性、2個の胚珠があり、解剖学的には側膜性である。心皮の背部管束のみが花柱脈となる。

○高等植物分布資料 (82) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (82)

○ヘゴ *Cyathea spinulosa* Wall. 1973年2月11日、田辺高等学校生徒の米本憲市君が、和歌山県田辺市上秋津左向谷でクサマルハチらしいシダを探ったと、同校の後藤伸教諭に聞き、採集品を見たところ、葉柄基部に刺があるので不審に思い、自生地を訪れて調べた。自生地は海岸から約6km山に入った南向きの小さな谷で、海拔150mくらいのスギ植林地の平坦な林床に唯1株だけあって、50cmくらいの葉と、数対の下方羽片だけをつけた葉3枚とを叢生していた。京都大学の岩瀬邦男教授、大阪市立自然科学博物館の瀬戸剛学芸員に標本を見て頂いて、ヘゴであることが確認された。ヘゴの本州での産地には、三重県尾鷲市で現在までに2株発見されているが、樹状に成長したヘゴは発見されておらず、南方より飛来した胞子が定着、発芽してこの大きさにまでなったものかもしれない。なお、標本は大阪市立自然科学博物館に納めた。

(田辺市 [REDACTED] 真砂久哉)

□J. D. Dickson : **Bryophytes of the Pleistocene.** 256 pp, Cambridge University Press, 1973. £12.80 (¥11,520). 日本では化石コケ類の記録はごくまれであるが、欧米ではいろいろな報告がでている。上記の本は、イギリスの第三紀を中心とする化石または半化石 (subfossils) の記録の集録である。まず現在のイギリスにおけるコケ類 (蘚類) の分布を述べて、イギリスに Oceanic element が多いことを明らかにし、このようなフローラ成立が、第三紀の化石からどのように説明できるかを論じてある。第三紀以降の花粉分析などで、コケ類の胞子が充分解析されていないとして、胞子の Scanning electronmicroscope による形態学的な研究もおこなっている。化石記録をもとにイギリスのコケフローラの成立を4期に分けて論じてあるが、この部分は面白い論議になっている。日本でもこのような面での研究が今後必要ではないかと思いつこの本を紹介する。

(井上 浩)